自序

凡そ琵琶琴瑟歌を奏せんとするには まづその歌曲の性質 精神のある所を窺ひ 然してその歌詞に従ひて 悲哀なる個所は悲哀 壮快なる個所は壮快に曲節に抑揚を附し 聴者をして恰そその境にあるが如く感せしめざるべからず これ琵琶奏曲 第一の要義なり故に吟ぜんとせばまづ精神の沈静を計り 熱心に毫も浮華なる所なかるべし 本書は一定一句 楽の符号を以て楽譜を附し 如上の精神を以て曲節に対し 節か心ある士の為めに編製せしものにして 節を歌ふ人は必ず 節の又拍子 精神の投射 大なればなり 大方諸る業醫の徐慢一曲を奏して 悠然乃氣を養ひ 弱く

謡節注意

音の大小高低等は そもそも大小長短の符号を以て示せり 大干とあるは最高音を称するものにして 低に注者の大干を定むれば其の人の音聲を以て歌ふものとす 如何となれば 注者が自身の最高音を考へ 然して 第一に聲に困難を来すのみならず 第二に為すべき音聲に 餘裕なく 聽者に苦しきものなり 中干とは 初め地音に出で中以六七の干音に上げ 亦地に落すものなり 地音とは 三若くば四五位の音にして 歌の曲譜により異る者とす 崩しとあるは勇壮活発の音を以てすべし 吟詠は概して悲哀なる場合なれば その心地を以て 渡聲等を用ふるを可とす 段落 即ち 節切りは 符号の示す通りに聲を引き廻し 渡りを地に落す

明治四十一年文月下浣

編者識

常陸丸

紅露の軍旗くれなゐに進みて南山の、嶮阻も
にぎりくに音ふ 要害の、旅順港も閉塞され
鷲の掴むてふ満洲も、君が稽威の旗風に、殿倉
靡かぬ草もなし 千代 心伝切紫の島はなれ玄海
灘の波平 小吹く潮風ふ日の丸の、旗靡かす常陸

明治41 8 1
交内

丸、彼を繞ひて進み行く、船路めはては白浪の、寄る辺なき方なく舞……何を荒ぶる荒潮の逆捲く中に黒煙、ひと筋ふきり来て我れ取り捲く敵の船、夫は何事ぞと言ふ間なく、砲射砲撃雨あられ、進み進まん間もなく千里に生る猛獣も水ふくりてはいつにせむ、万里

を翔る大鵬も、浪ふ翼折れぬべし、心ばかり早やそども、運送船の悲しきは、進退きわまりて、方なきも敵艦に、任せはてしぜ是非なし」、彼は如何なるかむれず、雷霧ふこゝ陣ゐわかねども、同じ様なる運の末、輸送指揮官須知中佐、最早、ひとすじ道と思ひ

帝、大いに保少尉のさてげある聯隊旗ば手
に持ちて「吟味」都の方ば伏し拜み、火ばはな
ちそ懸まこければ、各將校も皆取りどりに重
の品ば懸すてめ、中佐は軍刀抜きけなり、意
念の心やる瀬無くて岸となく泣くに腹ぬき
切りてばうせぶまる、連隊なる將校初めと

以下士兵率ふ至るまで、服を開き蓆地ぬて
同じ様ふ伏すめあり、海ふ投じて死する
もあり、敵弾ますすくしかりさば、早板上は
多くの人に、「千」弧嶺の山地築きはて
流血四方に玄海の波はあけにぞ染
帝国、哀れにあまる世常達丸、忠義

の聲は轟く、我武勇の将士まで、無限の
恨みちらせて浪の泡とぞ消へましは、明
治三十餘七年の六月十五日の暮れつ方
夕日は波に落ちされど、霧立かゝる大海
原は、あやめもわかぬばかりなり、實に忠
烈のますらをが、十年の間朝夕、磨ききた
へし日本刀、試さむ敵が前にあらで、遺恨の
刃ひと太刀も、酬ひん事もなく千里、
駒のひづめに満洲が踏みにじられしを
ゆめなれや、ウラルバイガル打越へぬあらまし
事もはかなりしか、思へば無念の極み
なり、あゝ一聯隊の我勇士、水漬く屍と消く

一ゆど、國小碩ぜ一はゆ城が清き其
名は第代も、郷音きこの、灘ふ吉波の、海
ゆる時なく仰かれ人「殷落」来まぐ遠く
流るふ

明治四十一年七月廿二日印刷
明治四十一年八月一日發行

出版目録

國の御柱 附送別 城山
錦の御旗 附蓬来山 廣瀬中佐
威海衛 小督
臺灣入 川中嶋
吹雪の敵 吉野落二殷
任丸 石童丸

257
530

不許複製

曲譜 西田金起
發行者 東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地 西村寅次郎
發行者 東京市日本橋區馬喰町四丁目廿壱番地 鈴木武二郎
印刷者 東京市神田區駿河臺袋町十一番地 須佐權平
印刷所 東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地 東陽堂
發行所 東京市日本橋區馬喰町四丁目廿壱番地 東雲堂
發行所 文友堂

正價壱部金七錢